

成城だより

大岡昇平



文藝春秋

成城だより

大岡昇平



文藝春秋

著者略歴

明治四十二年東京に生れる。
京都大学仏文科卒。昭和十九
年応召、二十年ミンダナオ島
で米軍の俘虜となった時の体
験から執筆された「俘虜記」
は戦後文学の代表作の一つと
なる。「野火」「武蔵野夫人」
「花影」「レイテ戦記」「中原
中也」ほか著書多数。

成城だより

昭和五十六年三月五日 第一刷

定価 一千円

著者

おおおかしょうへい
大岡昇平

発行者

杉村友一

発行所

株式会社
文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(〇三)二六五―二二一

印刷所 精興社

製本所 矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

©OOOKA SHOUHEI 1981

Printed in Japan

目次

十一月の新年	5	曇りのち晴れ	87
年末断想	12	友達は寂しく帰って行った	107
冬眠日記	24	梅雨早く明けろ	135
リズムの変化	34	事故の夏	147
七十一年目の春	47	辞退の秋	172
花便り	60	分裂の現在	202
後記			

裝釘
坂田政則

成
城
だ
よ
り

十一月の新年

十一月八日 木曜日 晴

「群像」新年号に「草枕」についての論文五十枚渡す。一九七五年成城大学教養課程での講義に加筆したもの。テーマはずっと前に起してあったが、その後、病氣続きで発表する形にできなかったもの。

新年号原稿かなりあり。一度にはむりなので、九月から下書きが書溜めてあったが、最後の仕上げに結局手間取る。オーバーワークなり。寒波到れば、昼間のあたたかい間しか坐れなくなる不安あり。このところ暖かい日が続くのでたすかる。一三時半、昼食を食べかたがた、駅前まで散歩する。

成城へ越して来て、もはや十一年である。一九七六年来、白内障手術、二度の心不全発作で、老衰ひどく、運動は散歩だけとなる。それも駅まで十五分の距離で疲れる。往復できず、帰りはタクシーとなる。

駅までの通りの家、建て替り多し。教会のようにガラス窓を二階まで通した家あり、料亭のような和風家屋、車を軒下に引き込んだ能率的な現代的建築もあり、面目一新して、眼を

楽しませる。

富士屋よろず屋付近は、昭和二年私が成城の学生たりし頃の食堂のあったところ。アイスクリーム専門店、婦人服店で、その向いに陶器店兼食料品店開店、サンドウィッチを食わせる。そこまで歩いて来たら、腹減ってぐうと鳴る。

スモークドビーフサンドなるものメニューにあり、ローストビーフより塩気少いとのこと、それは心不全にはよいので、注文する。ついでに百グラム買い、駅へ行くのをやめて、引き返す。歩行距離は駅まで片道と同じぐらいなり。駅付近へ行って、本屋の新刊棚をのぞいても、このところ原稿製造のために、読むべき本たまりあり、買っても読めない。

各雑誌十二月号到着しつつあり。新人賞号なり。年間回顧少し。十一月に出る十二月号でやる回顧は、十月までなること、各誌一斉に気が付いたらしい。新年号で回顧と来年の展望をいっしょにやる方が賢明。この二つは元来一つものなのだ。

十二日 月曜日 晴

午前中、朝日出版社レクチュア・ブックスで、大野正男氏に受けた講義『フィクションとしての裁判』のゲラ直し終り、あとがき「講義を受けて」二枚半。二六〇余頁。これはさる七、八月、河口湖畔のレストランで、三回対談したもの。大野氏は『事件』の相談役として、すでになん度か対話の経験あり、聞き役を果せばいいのだから、と気軽に引き受けたれど、

七月より体調悪くなり、しくじった。三度の対談はなんでもなかったが、その後の整理、加筆に手間取る。新年号原稿の中へ割り込んで来て、閉口す。

本文中は元号を使用する。裁判関係は、判例その他すべて元号一本槍、現職弁護士の大野氏の頭もそうなっている。それに合せる必要あるのなり。

暖かい日続く。暖かいうちに、散歩しておかないといけない。十二月からは外出禁止となる。心不全には風邪が敵、発熱がよくない。午後三時、朝日出版社のK氏来り、ゲラと寄贈者リスト渡す。

散歩の必要。大腿筋の如き大きな筋肉を働かすと、脳内の血行が活潑になるとの説あり。実際、古今東西に歩行の詩文多く、筆者も以前は行き詰ると書斎内をぐるぐる歩き廻ったものだった。この頃はその元氣はないけれど、とにかく歩いて膝を屈伸するのに快感あり。こんなことにも快感を意識しなければならぬとは、情ないことになった。

ただしゲラ直しの疲れあれば、駅まではむり、家のまわり一巡、五分の散歩コースあり。家の前より、北に行く狭い道は、昔、まだ小田急開通前、京王線烏山が成城学園の駅だった頃の通学路の一つだった。少し行くと、ケヤキの樹群あり、道路「形になっているところの記憶があった。わが家付近にて、昔の形を残したところ。そこを通り抜け、右に折れれば、最初に交るのは、学園前の古い通りの延長なり。右折すればわが家の方角へ戻ることになる。家並切れ、陽を浴びたる畠、空地の向うに夕日輝く。その方角の遠くに見える、這いつく

ばったる如き平家が、わが家なり。窓小さく、屋根黒く、倉庫の如き外觀。十一年前、この空地に接して建てた時は、空地はすぐ新築の家で埋ってしまうだろう、マンションが建っても驚かぬように、窓小さく、防音として、防衛態勢ととのえたのだったが、その後高度成長とまり、家建たず、わが家の前の道は、いつまでも行きどまりにて、車入って来ず、静かな十一年を過ごした。

土埃は室内に侵入し、窓枠にたまったが、とにかく静かだった。屋内座業にはこの上なくよき環境だった。十一年使えれば満足だ。その家の外貌を遠望しつつ、空地中の道に戻る。

十三日 火曜日 晴

一四時、大江健三郎君来り、武満徹氏の新作レコード持って来てくれる。「イデーンⅡ」、裏は「ウォータ、ウェイ」「ウェイヴズ」など、水についての音楽。五十四年度芸術祭参加作品。一九七五年に武満氏と「水」について対談した。それが最近の対談集に入ったので、思い出して贈ってくれたらしい。

大江君としばらく雑談。十二月に出る新作、彼の生地伊予大洲盆地付近を舞台とし、至福千年のモチフを取り入れたるものとし知らず。彼は私と違って新作について、べらべらしゃべらず。作品発売を待つほかなし。

ボルヘス来日中。大江君、二度会った由、英語会話達人ならずという。ブレイクの「煙突

掃除」その他について語ったという。韓国政変、暗殺の現場はほかにありとの説ある由。

武満氏のレコードを聴く。衆想深まり、構成的要素強くなる。人間はいずれも堅固に向って円熟するものだろうか。

白内障手術してより空間感覚かわり、その上、椎骨血管不全、つまり立ちくらみあり、よろよろ歩きにて、コンサートに行けず、音楽のよろこぶべき来訪なり。

十四日 水曜日 晴

夕刊にKDD汚職、その他官庁公団のカラ出張、カラ接待、カラ超勤手当の記事多し。小生は新聞社、工業会社、造船所など合せて七年、サラリーマン生活あれば、経験あり。これは明治の官僚商法以来の悪習にて、一朝一夕にて改むるものにあらず。目立つことをして見付かるのが愚。新聞種にされた連中はスケープゴートだ、と思っているだろう。

ほかの仕事にかかっていたが、昨日、大江君との話にブレイクが出たのがきっかけで、富永太郎が大正九年に読んだ『ブレイク詩集』のアンダーラインについて、メモしてあったものを定稿にする気になる。

W・G・ロセッティ編とほぼ同じ内容の、一九一四年の廉価本なれど、「無垢の歌」「経験の歌」をよく読んでいる。当時まだ翻訳なし。特に「経験の歌」について然り。

双方にある「乳母の歌」「煙突掃除」などに傍線あり、それぞれの対立点に注意している。

英詩は、ポー、テニスン（漱石關係にて）のほか読んだことなし、songs を読むに楽しみあり。夜、ベッドで河合雅雄『森林がサルを生んだ——原罪の自然誌』（海鳴社）を読む。河合氏はイギリスの魅力あるサル学者ジェーン・グドールの『森の隣人』（一九七一年）の訳者にして、一度「中央公論」にて日本ザルについて、お話を伺ったことあり。ジェーンはチンパンジーの生態を観察して、樹幹のアリの子をとり出すのに、小枝を「道具」とするのを発見した。チンパンジー同類食せずと観察したが、こんどの河合氏の新著によれば、リーダー交替にともなつて既存の子供をみな殺すという。すると親の雌発情す。そこで交尾と親密によつて支配を確保するという。ファシストといわれるローレンツでも、霊長類にてはヒト以外は同類食せず、と書いた。人性悪なりとせば、それはサルの段階からはじまっていたのなり。太平洋戦線、アンデス山中不時着機の如く、状況によつては人肉食やむを得ず、しかしそれだけでは問題は解決しませんね、と呟きし人の顔を忘れず——故石原吉郎氏なり。

十五日 木曜日 晴

やや寒し。「文藝」のK君に「富永太郎ブレイクを読む」十二枚渡す。漱石作の英詩クレイグ先生にブレイクに似てる、といわれたとの記事あったこと思い出す（彼が明治三十六年になぐり書きした英詩は、ちっともブレイクに似ていないのに）。漱石のブレイクへの書き込みを見る。岩波版全集三十二巻別冊上、「眼かくし鬼」「煙突掃除」（「無垢」の）に「平民的」、「バ

ツツ氏へ」「愛の終り」「水晶の部屋」「ウイリアム・ボンド」に mystic、「無垢のきざし」に「蓄生(マヤ)に対する同情」、有名な冒頭四行に「奇句」とあり。「心の旅人」に symbolic。

神秘的、象徴的の評語多く、正しく読んでゐるけれど、「煙突掃除」などについて「平民的」の評語は、ホイットマンに擬っていた学生時代の読みを示唆す。漱石がいつ頃この本を買ったのか、いつ読んだのか、書込みの筆蹟などにて推定できないものか。それらについて注解なきは不備、怠慢なり。やり直してほしいものなり。

講義か研究書を手引に、読んだのだろうが、「経験の歌」と諸予言書に、まったく書込みないのは奇妙。しかしこれは彼がそれらを読まなかった証拠とはならない。人は読んで書込みする時あり、しない時もある。

年末断想

十二月五日 水曜日 晴

順天堂病院北村教授の定期診察日（月一回）。年末と五の日重なり、道路混み、お茶の水まで一時間半かかる。心臓少し大きくなっている。利尿剤を増やさねばならないが、これを増やすと体だるく、仕事にならないのだ。

新年号約束原稿、九月から書きためてあったけれど、定稿にするのに、結局手間かかり、過労となった。来月は「新潮」九百号記念にて、付合わねばならないが、以後、この日記を除いて、一切ことわることにきめる。さもないと「富永太郎全集」（角川書店）いつできるか分からない。これは生きているうちにどうしても完成しなければならぬのだ。

旅行中のほか、日記をつける習慣を持たなかったが、五、六年前、もの忘れひどくなったのを自覚してより、日々の出来事を出版社のくれる当用日記にメモする習慣ができた。それを発表用にふくらませるだけだから、あまり手間かからないはず。

六日 木曜日 晴

暖かい日、続く。「新潮」のための小説「オフィーリアの埋葬」を少し。これは一九五五年の中断作『ハムレット日記』の一部にて、当時突然この場面を書く氣を失って、断片のみ残る。『ハムレット日記』はドーヴァ・ウィルソン『ハムレットの中で何が起っているか』(‘What happens in Hamlet’ 1935)の処方箋により、政治的人間、つまりデンマークの王子としてのハムレットを書いたつもりだが、この場面を欠くのでうるおいなし。単行本とせず、こっそり全集にすべり込ませた欠陥作品。しかしこのままにして死ぬのは口惜しいので、この際書いてしまうことにする。万事、片付け仕事ばかりなり。

一五時三〇分、家人に駅で読売新聞夕刊を買って来て貰う。加賀乙彦「中原中也の診断」掲載。去る十一月二十三日朝刊は、「千葉発」として、中村病院にて中原のカルテ発見を報ず。内容の一部紹介され、一九三七年一月九日入院の期日確定は貴重であったが、病床日記の表紙写真が十三版まで出し、Schizophrenie (精神分裂病)の文字が判読できたため、恐慌に陥った。しかしカルテ全文を見た加賀氏の論文によると、それは入院時の仮の診断らしく、「初ヨリ落着イテ居ラレ食事ヲ致シ別ニ変リナシ」とあり。三日目には空笑、独語消え、一週間後に「全ク落着キ元氣」、二月一日に軽病棟に移っている。こんなに急速に恢復するのは分裂病ではなく、「ノイローゼ圏の場合に多い」という。

加賀氏は周知のように現役の精神病医だから、病跡学的判断は、カルテだけでなく、生活歴と作品の全体を見なくてはならない、と慎重だが、この時の入院の経過が「精神分裂病」

を示していなかったと一応確定したことは大きい。

中原は退院の八カ月後に結核性脳膜炎で死亡している。当時、小林秀雄が不用意に「狂死」と書いたため、入院と連続した精神病の結果と考えられがちだった。しかし死因が中村病院（当時、千葉寺療養所）入院時の症状と関係ないことは、広島のものもお医者さんの深草獅子雄氏（松坂義孝）の調査ではほぼ確定していた。

それでも千葉寺療養所入院中につけた「日記」があつて、問題が残った。私は一九五三年に京大の精神科教授村上仁氏の鑑定を乞うたところ、「ヒステリー」ということであつた。この意見は加賀氏も引用していて、「軽いヒステリー程度」となっている。実は「軽い」と「程度」は筆者のレトリックである。諸書に引用されているので、この際、村上仁氏のために明らかにしておく。彼は精神病の疑いに対して「たゞのヒステリー」といったのだった。

しかし中原は一九三二年にもノイローゼをやっている。福島章氏の「分裂病圈」説あり（「正気と狂気の間」至文堂一九七二年）、私もその後多くの人の証言を聞いて、その疑いを持つに到った。「千葉寺日記」は多分彼が軽病棟へ移ってからの療養日誌であり、入院時には「子供以下であつた」との、院長の言葉が記されている。

村上氏の鑑定は、私が中原の「狂死」を否定したがっているのを知つての「慰撫的」なものであるう、と書いた（「中原中也必携」学燈社一九七八年八月、その他）のは、村上氏に迷惑がかかつてはいけないとの考慮からであつた。それだけにこの度のカルテの表紙に書かれた病